（ 続紙 1 ）

| 京都大学 | 博士（地域研究） | 氏名 | 柳沢　英輔 |
|---|---|---|---|
| 論文題目 | 地域研究における音響・映像情報の活用<br>―ベトナム中部高原ゴング文化の研究を事例として― | | |

（論文内容の要旨）

本論文は、文字を中心とするテキスト情報に加えて音響・映像情報を活用することによって、地域研究分野に新たな研究方法を導入しうることを論じたものである。その事例として、ベトナム中部高原のゴング文化を取り上げ、それに関する諸事項について音響・映像情報の活用例を示して、その問題点を検討している。本論文は、5 章と付録とからなり、付録には、音響・映像情報を利用するための解説と、論文のマルチメディア版および映像作品の DVD が添付されている。ここで用いられている主な資料は、2006 年から 2008 年にかけて断続的に現地で行った調査に基づくもので、55 村落でのフィールドワークによって得た民族誌的資料と音響・映像情報とが含まれている。

第 1 章では、記述型フィールドワークの方法論を再検討し、その限界を乗り越えるために「ビデオ記録型フィールドワーク」を提示し、その利点について論じている。次に、地域研究における映像の価値を考察し、音響・映像メディアの発展とフィールド研究との関係について検討し、最後に、先行研究の枠組みを批判的に検討しつつ、本論文の目的を示している。

第 2 章では、音響・映像情報の活用について、申請者が行ってきた種々の実践を挙げて、その方法と意義ならびに問題点について論じている。映像の活用については、民族誌映画の制作・上映を例にとって、撮影・編集・上映の方法と、その意義について考察し、次に、映像による記録・表象の問題、映像の活用の際に生じる著作権や肖像権の問題について検討している。音響の活用については、音響を含む映像とは別に音響を記録する意義について考察し、モノ・環境の聴覚的な捉え方と地域の音響を記録する意義とについて考察している。最後に、サウンドアーカイブの構築、Web サイトでの公開などにつきその活用方法を示している。

第 3 章では、まず研究対象であるベトナム中部高原ゴング文化の概要を記述し、本研究の調査地、調査方法、調査対象（バナ族、ジャライ族、セダン族）の概要を述べている。次に、ゴングの分類と名称、ベトナム国内でのゴングの製造と流通過程について検討し、ゴングの音響と価値について考察するとともに、ゴング調律師に焦点を当てつつ、聞き取り調査と調律師の調律作業を記録した映像の分析とから、ゴング調律師の役割とその調律方法とを明らかにしている。最後に、ゴング音のスペクトル分析を行い、調律前後の周波数構成の変化から調律の効果について考察している。

第 4 章では、ゴング演奏を中心にした聞き取り調査および観察の結果をもとに、バナ族およびジャライ族のゴング演奏機会が、伝統的なゴング演奏と改良ゴングアンサ

ンブルとに分かれること、その演奏形態と旋律の比較から、前者に比べ後者は、聴衆を意識したパフォーマンス的側面と旋律や曲といった概念とが著明であることなどを指摘している。次に、改良ゴングアンサンブル誕生の背景にキリスト教の普及と西洋音楽の浸透があること、およびその演奏形態が政府主催の文化イベントなどを通して受容されていることを論じ、最後に、二つの演奏形態が当該地域社会の中で共存していることを論じている。

第 5 章では、結論として、地域研究に音響・映像情報を活用する意義を論じ、音響・映像の引用システムの確立と知的情報の共有、双方向の対話との重要性を指摘している。

付録では、音響・映像情報の収集ならびに編集の具体的過程を解説し、本論文のマルチメディア版および映像作品『ベトナム中部高原のゴング文化』の DVD を添付している。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

従来、地域研究においては、現地調査から成果の公表まで、文字情報を中心とし、図表および写真情報は補助的に利用されて、音響・映像情報を提示する必要があるときには、CD 等が報告書の付録として添付されてきた。これは研究結果の表現を紙媒体によっていたことからくる制約によるところが大きいが、近年、メディア環境の急速な進展をみて、音響・映像情報の活用利便性が格段に向上し、論文・報告書を Web サイトに掲載することが容易になったため、文字情報と同じように音響・映像情報を利用することが可能となった。

このような時代の地域研究は、その方法論においてもおのずから新展開が求められるところ、申請者は本論文において主として以下 2 点の学術的貢献をなした。

まず第 1 に、申請者は、音響・映像情報を地域研究に活用する場合に問題となりうる論点を整理し、考究を加えた。申請者は、映像の活用については、民族誌映画の制作・上映を例にとって、撮影・編集・上映の方法とその意義、映像記録の表象問題、著作権や肖像権について検討した。音響の活用については、映像とともに録音される音響とは別に、音響を記録する意義ならびにモノ・環境の聴覚的な捉え方と地域の音響を記録する意義とについて考察した。申請者はまた、サウンドアーカイブの構築と地域情報を Web サイトで公開する場合の諸問題とを、具体例を挙げて検討し、その活用方法を示した。さらに地域研究における映像の価値、音響・映像メディアの発展とフィールド科学との関係、デジタル技術の発展が人文科学系の学問分野にもたらしつつある変化について考究を加えている。これらの検討の結果、地域研究に、文字情報の補助としてではなく、音響・映像情報を利用する場合の方法論に新たな道を拓き、論文・報告書を Web 上に掲載する方法を提示した。これは地域研究の方法論とその研究成果の公表方法とに対して革新的な転換を促すもので、今後の地域研究に対する相当の貢献が期待できる。

第 2 は、申請者が「ビデオ記録型フィールドワーク」と命名したフィールド調査を実施して、ゴング文化に関する諸事項を音響・映像情報を含めて把握し、記述するとともに、その結果に基づいて文字情報のみでは論じられないゴング文化の側面を論考したことである。申請者は、聞き取り調査と調律師の調律作業を記録した音響・映像の分析とから、ゴング調律師の存在がゴング文化の維持に不可欠であること、およびその調律技術の高いことを明らかにし、調律の効果を調律前後のゴング音のスペクトルの変化によって明示した。さらに、ゴング演奏を中心にした調査結果をもとに、バナ族およびジャライ族のゴング演奏が「伝統的なゴング演奏」と「改良ゴングアンサンブル」とに分かれること、前者に比べ後者は「パフォーマンス」的側面と「旋律」や「曲」といった概念とがより著明であることなどを解明した。

申請者は、「改良ゴングアンサンブル」が、キリスト教の普及、西洋音楽の浸透の結果として生み出され、かつそれが新たな演奏形態として受容されていることを明らか

にした。これは、ベトナムのゴング文化の実態とその変化を明らかにした点で、ベトナム地域研究ならびにゴング文化研究に多大な貢献をなすものである。

なお、本論文は印刷製本して提出された。それは現在の制度に従ったのであるが、本論文全体の趣旨とは矛盾するところ、この点につき申請者は、付録として論文のマルチメディア版 DVD を添付することによって矛盾の解決を図っている。

以上のように申請者の論文は、本研究科にふさわしい内容を備えた優秀な研究成果と判断される。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 22 年 1 月 7 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。